

王の財宝貰つたけどあ  
んまり宝具が入ってな  
かつた。

駄神

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

よくある神様転生をした主人公、転生先は兵藤一誠。  
だが彼は引きこもつていた。

特典は生前好きだったf a t eから『王の財宝』だが中身はエアと天の鎖だけスカス  
カの『王の財宝』で頑張る主人公。

稚拙な文ですが目を瞑つていただけると幸いです  
よくある主人公最強ものです。

苦手だなつて人はバツクを推奨します

目次

終了と悲劇	開始と困惑	特訓と当日	唐突と波乱	焼鳥と暴露	終劇と開演	真名と威力	誘拐と交渉	束縛と衝撃	転生と会長
66	60	55	51	38	32	25	16	8	1

# 転生と会長

「はあ、今日も学校かあ‥」

まあ行つてないんだけど心の中で追記しておく

俺、兵藤一誠は持病の『学校行きたくない症』のせいで学校を行かないヒツキーなのであつた。

『相棒、また学校とやらをサボるのか?』

俺に喋りかけてくるコイツは神器、『赤龍帝の籠手』というやつに宿っているドライグ。まあ腐れ縁の相棒つてやつだ。

「当たり前だろ? 俺が何年引きこもりやつてると思つてるんだ。小3からだぞ?」

「イッセー! ご飯よー!」

「はーい!」

両親は俺に甘い。

学校に行つてない俺にこんなに優しくしてくれる。

まあ学校から送られてくるテストは全部100点だつたりするからかね?

俺はご飯を食べに部屋を出ようとすると、扉の近くに立て掛けてある姿見が目に入

る。

はあ、と溜息を心の中でつく。  
そこに写っているのはどこかの金ピカの英雄王と瓜二つの容姿だからだ。

俺は転生者という奴だ、神の不手際でどーちゃらーーちやららしく。  
特典になにかをやるって言われて俺は好きなアニメ、『f a t e』から『王の財宝』を  
所望した。

すると神はこう言つた

『王の財宝』はくれてやる。だが中身は探せえ！この世の全てを転生先に置いてきた。  
あ、『天地乖離す開闢の星』つまり、エアと『天の鎖』を入れておいてあげる、あとは世  
界観というか宝具とか本当はない世界に無理やり入れたから異常が起きるかもしけな  
いけど自分で対処してね、大サービスで容姿はギルガメツシユそのものにしてあげるか  
ら感謝してよね』

と、少し幼女に近い容姿をした神様に言われた

そして、俺は『ハイスクールd×d』の世界に転生した。

元々、大学生で結構偏差値が高い大学に通っていたから勉強は問題なかつた。  
ただ問題なのは中身がスカスカな『王の財宝』だつた。

宝具探しはまあまあ集まつた。だがまだ原作の英雄王の様に財をポンポン打てるほどには集まつていらない。

後は、俺がそこまでハイスクールd×dという世界を知らないということだ。  
せいぜい知っているのはバトルものと主人公がヒロインの乳首つづいて覚醒したとかどうちやら辺りだ。

その上ドライグという存在、まだエアすら満足に扱いきれない俺に『赤龍帝の籠手』  
というチート。もうお腹いっぱいなんですけどっていう。  
え？ 別腹じやね？ って？

扱いきれないものが沢山集まつても困るでしょ。

俺は極力家からでない。

だつて外怖いじyan?

こんな死が近くに転がつてゐる世界で極力出歩きたくない  
前なんか歩いてたら世界最強?の龍神様と会つちゃうし  
ドライグがやばいぞーみたいな事言うし

はあ、世界は俺に冷たいです

とりま、母さんの美味しいご飯を食べてA○azonからのお届け物でも待つかな。

「ん？ インターほんがなつたいやはや、噂をすればなんとやらですな。  
母さん、俺が行くよ」

と、玄関に行こうとしてた母さんを止め玄関に向かう  
「はいはーい、ちょっと待ってくださいねーっと。ガチャつとな

「あの…」

「バタンとな」

よし、俺なーんにもミテナイネー。

どつかの生徒会長なんてみてないしー、悪魔の生徒会長なんて見てないですはい。  
俺が進学した先是駒王学園。つまり悪魔がいっぱいいる所だ。

本当ならここには絶対進学したくないと思つて別のとこ進路先にしてたらある日突然紙に書いてあつた第1希望も変わつており、俺の周囲の人間は皆俺が駒王に行くつて話になつていた。

つまり、世界の修正力なのか神の修正力というわけだ。

「あの、開けてください。今日こそは学校に来てもらいます」  
まつたくどつかの眼帯少女みたいな声しやがつて

「今日は、いえ今日も無理です支取先輩。」

今日は通販で『刺し穿つ死棘の槍』が来るのだから…。

俺が家から出ないで宝具収集出来る大きな理由の一つ時々パチもんにぶつかるけど。

まあ、当たつて碎ける？

時々国外でたりして集めたりはしてるから許してほしい

「それは、貴方が昨日発注したゲイボルグに関連があるんですか？」

⋮(、ω、)ふあつ。

「え、えーと、何故それを？」

「へ？ま、まあ会長権限です。」

なんてこつた。

「それに配達の届く場所も生徒会室にしてあります。来ないと捨てますよ」

「なんて、理不尽な…。あー、わかりましたよ。行けばいいんでしょ？行けば。」

そう、行けばいいのだ。取り敢えず行つて取つて帰つてこよう

「やつと、来てれますか…ふう。」

ドア越しの会話である

取り敢えず着替えるか。

着替えたながら考える、なんでわざわざ生徒会長が毎朝毎朝来るのか  
それに悪魔つて朝苦手だつたよな?  
よつぽど暇なのか?

「なあドライグ、悪魔つて朝苦手だよな?」

『ああ個体差によるけどな……まだわからないのか相棒は……』

「母さん、行つてきます。」

「うん、ちゃんと頑張つてきなさいよ?」

「ういっす」

まあとりあえず、すぐ帰つてくるから

扉を開けると、黒髪美人の生徒会長がいた。

「おはようございます、兵藤くん。」

「おはようござります、生徒会長。」

学校は家から近いので、二人で並んで歩いていた。

「あ、そうだ兵藤くん。」

「はい、なんでしようか?」

いきなり自分の鞄の中をゴソゴソとしだして  
「腕を出してもらえますか?」

「ああ、はい。どうかしました?」

言われた通り腕をだすと、カチヤツと手錠をつけられた。

「え?」

俺が驚きを隠せないでいると支取先輩は自分の腕にも手錠をつけた。そして

「帰宅防止です」

つとにつこりと向日葵が咲いたような笑顔で笑った

まだまだ俺の久々の学校生活は終わらなそうだ。

## 束縛と衝撃

学校についてからが問題だつた。

まあ、登校してゐる時点で問題は起きていたのだが

「生徒会長と手錠を通してハードな手の繋ぎ方してゐるやつ誰だ？」

つて話題が持ちきりだつた。

校舎に入つてもグイグイ3年生の教室に向かつて進んでいく会長

「えーと、支取先輩？ここ3年生の教室ですか？俺2年生なんですけど？」

「はい、兵藤くんは2年生の勉強じや満足してないんですね？なので3年の勉強とい  
うわけです。学校からの許可取れています。」

手際が宜しくて困つてます、はい。

つてわけで、机を会長の所にくつづけて授業してゐる状態

手錠？とれてないに決まつてるじやん？

取るに取らざるを得ない状況……いいこと考えた。

授業が終わつてから直ぐに隣にいる会長にこう言つた

「支取先輩、トイレに行きたいんですけど。手錠取つてもらつていいですか？」

フツフツフツ…：これが俺が考えた最強の状況じやい！

⋮：ああ、ちょっとまってくださいね」

と言うとまた鞄をガサゴソしだし取り出したのは首輪だつた。  
本能が感じた。アレをつけられたら逃げられない⋮：と

「な、なにをしようとしてるんですか？それはまずいと思うんですよ！」

逃げる！

会長」と引つ張つて走ろうと思つたら

「椿姫！」

そう会長が叫ぶと副会長が俺を羽交い締めした。

「あまり、暴れないでください。」

俺が逃れようとジタバタしているとさらに強くした。  
くつ！このロックマンめつ！

しまつ…！

力チャヤリそんな音が首元からした。

ロックマンに意識を持つてきすぎた！

「これで少しぐらい離れても大丈夫ですね」

キランつと会長と副会長のメガネが光つた。

まだだ！まだ一つだけ手がある。

「くつ、仕方ない…じゃあトイレ行つてきます。」

順調だ、ちょっとジャラジャラするけど。

男子トイレに入り窓に近づき『王の財宝』でそこまで有名じやないけど別に無名な訳ではない剣を取り出し鎖を断ち切るために剣を振るつた。

ガンつガンつて音するけど全然切れねえ！

いや、あの一応この剣も宝具扱いされるんですよ？

まさか…！この首輪も宝具？！

くそ、やられた。

俺がトイレから出ると

意地悪な笑みを浮かべながら会長が尋ねてきた。

「どうしたんですか？トイレからガンつガンつて何かを壊そうとしてる音が聞こえてきましたよ？何かあつたんですか？」

ええ、色々と。主に俺の首がね。

「え？ そうなんですか？ 至つて普通でしたよ？」

白を切る、そしてまだ俺には手札がある。

『赤龍帝の籠手』だ。倍加で俺の力を上げていき手錠も首輪もとつて逃げる。完璧だ。

後はどのタイミングでぶち壊して逃げるかだ  
だが生徒会室に置いてあるという、『刺し穿スルつ死シテ棘ゲの槍ボルグ』を取りに行かねばならない。  
問題は、生徒会室がどこかわからない。

まあなんとかなるだろう。後は20分後決行だ。

昼休みに入る、これが逃げ時だ。

そして20分が経ち、作戦決行に移る。

小ネタだがドライグの『Boost!』ってやつ、音のON／OFFができる。

会長がチラツと窓の方に目を向け、意識が俺から一瞬逸れたその瞬間に手錠をぶち壊し首輪を思いつきり引っ張りぶち壊す。

よし！

「さらば、支取先輩！さらば3年生の皆さん！」

そう大声でいい、教室のドアに走つて行く  
まずは教室をでて直ぐの階段を飛び降りる。

「まちなさい！兵藤くん！」

俺を追つて会長がすごいスピードで追つてくる

俺と大差ないスピードで。

結構倍加の力で俺の身体能力を上げてるのにそれと変わらないってどんな秘めたる  
パワーが…！

くねくね曲りまくつて少しでも遠ざけようと努力する。

途中から追つてこなくなつた。

諦めたか？よし後は生徒会室をつと

「すみません、ちょっといいですか？生徒会室を探してるんですけど」

向かいを歩いていた白い髪の小柄な女子生徒に聞くと

「…そここの突き当たりを右に行けば着きますよ」

「ありがとう！」

よし、すぐそこじゃないか

そして、俺は生徒会室に着く  
ドアは少し強引に開けた、まあ多分壊れてはないだろう  
開けると机がありそこに細長いA○a z o nの箱がある。

これかと思い早速開ける。

そうすると、f a t eでよく見た赤い槍があつた。

これが本物か確かめる方法としては

『同調開始』  
トレースオン

『憑依経験、共感終了。』

俺は魔術師の師匠がいる訳じゃなく正直テレビの衛宮君のを見様見真似だ。

だから俺のオリジナルっぽくなつちやつてる部分が多少ある。だがこれで青い兄貴  
が使つていた証拠ができた。

『刺し穿つ死棘の槍』に憑依、経験を俺にトレースした。

ちなみにいうと俺にはこれしか使えない。

よし名のある宝具で手に入つたのはこれで4つ。

早速宝物庫に入れよう。俺の近くに金色の波紋が現れる。

そのなかにポイッと入れた。

「…なんですか…これは…」

声がしたので後ろをパッと振り返ると会長がいた

しまった、『刺し穿つ死棘の槍』が手に入つて興奮し過ぎた。

俺には数分、いや數十分に感じたが本当は数秒なのかも知れない。俺と会長の間には

妙な沈黙が流れる

最初に沈黙を破つたのは俺だつた。

「…えと、見ました？」

「はい。バツチリと…。」

やつぱりかー、まあ別にバレても問題はあんまりない。

だつて会長だつて悪魔。こういう力は知つてゐるだろう

「今になんなんですか？赤い槍もそうですけど！その後の金色の波紋とか！」

「えーと、企業秘密？」

「まあいいでしよう。それで、ですね。兵藤くん、私の眷属になりませんか？」

「ごめんなさい」

俺は悪魔になれない。

「あ、そうですね、話をすつ飛びましたね？ 1から説明しますね」  
「いえ、そうじやないんです。俺3分の2は神の血が流れててどうしても悪魔の駒を弾  
いちやうんです」

昔も俺を眷属にしようとしたえーとセラなんちやらレヴィなんちやらつて奴が俺に  
悪魔の駒を入れようとしたら  
悪魔の駒が弾かれた。

これはあの神様のせいだと思う、俺の体がギルガメッシュが神性を下げる前の肉体だということ。  
思う

多少違うところはギルガメッシュが神性を下げる前の肉体だということ。

「神の血ですか… そうですか、わかりました。それでも生徒会には入つてもらえませんか？」  
と、また向日葵の様な笑顔を咲かせた。

「あー、わかりました。」

まあ、学校にいかないけどね。

その日の帰りに俺は金髪のシスターに出会うこととなる

## 誘拐と交渉

取り敢えず1つ心の中でだが言つとおこう。

めちゃくちゃかわえ!!!

つて、声出して言いたい。

今、俺は金髪のシスターと歩いていた。

会長の束縛つていうかなんとゆーかは解放され、学校から帰宅している途中だつた。道を尋ねられたのだ、パツキンのシスターに!

目はくりくりっとして肌は雪のように白くて支取会長は美人だとすれば可憐という言葉が合うだろう。

なんていうんだろうこういうの、恋?いや天使だな…。

「本当に有難うございます…、ここでイツセーさんに会わなければどうなつていたことか」

しかも既に下の名前に近い呼び! (。・ω・。) ドヤアツ

「いやいや、そんな。でも遠い所からはるばる日本に、しかも駒王なんて遠かつたでしょ  
？お疲れ様です」

「でも、景色は綺麗で、私あんまり教会の外に出したことなかつたんですけど色々なものが  
見れて楽しかつたです！」

因みに言つておこう、今普通に会話できているが多分だが日本語ではない。

だつて口の動きが明らかに日本語を発音する時の動き方ではない。  
じやあ何故話してゐるか、しらん。

まあここまでくるとギルさすがとしか言いようがない。

「……で……すね。」

歩きながら話していたら、ついた。本当に教会かな？って場所についた。ボロ屋みた  
いな。

2、3年前はもうよつと綺麗だつた気がしたんだけど

「本当に有難うござります。もう少し時間があるなら中でお祈りを一緒にしていきませ  
んか？」

「そうしようかな」

俺は無宗教だけど神を信じていらない訳では無い。

だつて、会つてるし3分の2は神だし……。

中に入ろうと入り口に向かうとそこにはコートを着て帽子を被つた男が立つていた

「貴様がアーシア・アルジエントか？」

「… はい。」

「で、お前は誰だ？ 見るからにただの人間のようだが」

「うつせー、鴉。鴉がなんで教会にいんだ？」

この感じは墮天使だと思う。

俺は人間を見下してゐる系の墮天使は嫌いだ

昔、執拗に追つかけ回された記憶がある

でも墮天使が教会にいるつておかしくね？

天使だつたら分かるけど、元天使はお引き取り願いたい。

なんか癒してくれなさそう

「ちつ、貴様何者だ。」

と言ひながら、右手に光の槍を出現させる。

「ちよつと、辞めてください！ お二人共！ イッセーさんも！」

「アルジエントさん、ごめん君をここに置いとくのは良くない気がするからさ誘拐する」

俺はアルジエントさんに満面の笑みからは分からぬけど笑顔でそう答えた。

今のアルジエントさんの状況は言うなればはぐれシスターだ。

こうなつてしまい更には墮天使といった事を教会関係者に見られたらまずい。

なにより俺がアルジエントさんを気に入つた！

「さつきから無礼だぞ！人間！」

前見た時から思つたけどこの光の槍せこくね？って思う

なんか沢山出せるじやん。

だがしかし、今の私はフリーザの最終形態一步手前くらいなら倒せそうな気がするからなお前なんて目じやないのさ！

『Boost!』って鳴つてないから俺もよく分からぬけど何倍かはしてるだろうつてことで投げる姿勢に入つている墮天使に近づいていく

「ぬんっ！」

つて槍を投げると

「ふんっ！」

つて避けるこだまでしようか

いいえ、アツパー！

つて感じに顎に俺のスイングした拳が思いつきり当たる

多分これで意識の方は飛んでいいただろう。

「よし！アルジエントさん逃げるぞ！」

「え？で、でも。あの人がイッセーさんに殴られて気絶します！」

「アルジエントさん、墮天使つてのは一匹見たら3、4匹は周りにいると見ていい！つまりこーゆーことだ！」

「きやつ！」

俺はアルジエントさんをお姫様抱っこするとダツシユで逃げる。

逃げるところ？んなもん決まってるだろ！

会長のところさ！

「支取先輩いらつしやいますかー？」

ガンガンつと生徒会室を叩く、まあもうちょっと教会からの森の道をお姫様抱っこして走つていたかつたか聞かれたらイエスだ。

なんかイリヤ抱えて走つてる綺礼を連想させた。桜ルートね。

まああくまで俺の中でだが

「はい、います。ちよつと待つてください」

ガラガラつと生徒会を開けた会長の目が点になる。

まあ悪魔としてはドア開けてみたらシスターいたつてかなり怖い状況だと思う人間にしてみればピンポンきてでたら警察が警察手帳見せてる並だ。

「これはどういう事ですか？」

「ちょっと怖い眼差しで俺を見てくる

「いや、教会からシスターさらつてきたんですけど匿つて貰える場所と思いまして、支取先輩の顔が浮かんだんです」

「それは、嬉しいですが……。私達でも天使と戦うのは……」

「それは申し訳ないことをしたかな、天使の武器は悪魔に有効な光。光は悪魔にとつて毒になる

「大丈夫です、守りは俺がやります。匿つてくれる場所だけでも貰えませんか。」

「つて訳でここにいるのかしら？」

「目の前の赤い髪の悪魔。

リアス・グレモリー先輩に今日の出来事を話す、アルジェントさんと一緒に。

事情を話したら支取先輩は

「負けませんが、現状戦力はリアス達の方が上でしょう。ならそちらに居てもらつた方が兵藤くんの荷が軽くなるでしょう。ですが私達がシスターを攫つたなら問題に発展

してしまっては匿つて居たまことに居合わせたということだ。」

「って言われた。がこちらを心配してくれてる所は支取先輩の良いところなのだろう。

オカルト研究部と書かれてる札が下がつて居る部屋に俺達はいた。

周りには前、道を聞いたことがある白い髪の女の子と後はイケメンが1人後は美人が

1人

そして前には赤い髪の美人が1人

なんてステータスが高い部活なのだ！

「て訳でここにいるんですよ、少しの間アルジエントさんをここに匿つて欲しいんですけどダメですかね？」

「それで対価は貰えるのかしら？ 冷たく聞こえるかもしねいけどこつちにもリスクが伴うわ」

「わかっています、これからオカルト研究部兼生徒会として貴女の方の役に立ちます。貴女達が危険な状況になつたら俺が絶対に助けてます。それじゃあダメですか？」

今、俺には対価で出せる物と言つたら俺ぐらいしかいない。

相手が未知数な状況でアルジエントさんを守りながら戦うのはきついと思うし悪魔の皆さんとも仲良くはしておきたい。

昔、魔王と戦つたことがある。名前は確かサーゼクスだつたかな？すんげー強かつ

た、まじ絶対にもう戦いたくないって思うぐらい。エアは無闇に撃てねえし。最後の切り札だから使わなかつたというのもあるけど天の鎖は本能的な感じで宝物庫から出すと避けるつて言うチートだつた。

なので、悪魔とは敵対したくない

「そうね、どれほどの戦力に貴方がなるのは分からぬけどソーナから聞いてた事は確かね。わかつた、私側からしても貴方と敵対したくないのは事実よ。ここにアルジエントさんが居てもらつてもいいわ。ただ守りはしないわ、自衛はするけどね」

と優しい笑顔でそう言つてくれた。

「ただ小猫を連れてつて貰える？ 貴方に興味があるみたい。」

「分かりました、じゃあ宜しくお願ひします。」

小猫さん？ ちやん？ はアルジエンントさんみたいな完璧回復タイプでなく自衛もできるだろう

無言でこつちをじつと見てくる瞳はなんか強いぞコイツつて相手に思わせる瞳だつ

た

「ちゃんと守つてあげてね？」

「ういっす」

よし、どこぞのゴキb・：ではなく墮天使、光（槍的ななつ）の補充は充分か？

(。)  
・  
 $\omega$   
・  
(。) ドヤアツ

# 真名と威力

「…先輩はなんで学校に来ないんですか？」

俺は小猫ちゃんと2人で夜道を歩いていた。

さつき、家に少し帰り両親には友達の家に泊まるつて言つて出てきた。

友達なんて2、3人位しかいないんだけどね。

そんな小猫ちゃんから唐突に言わされた一言だつた。

「なんであつてなんでだろうね」

正直をいうと、学校に行くことに価値を見いだせなくなつてしまつていた。

元は結構いい大学に行つていたから小中高の勉強は苦にならなかつた。

まあ、後は引きこもり的なことを言つてしまえば学校よりパソコンとかゲームしてた方が断然楽しい。

「…じゃあなんで今日は来たんですか？」

「支取先輩に連れてこられた…！」

感謝してるといえば感謝している。

少しほは学校行つてみようかなつて気持ちになつたし、アルジエントさんに会えたし！

「そうですか…どうして私と会つた時走っていたんですか？」

「支取会長から逃げてた…！」

「レ（△；）へつて状態だつたんですつて。

でも『刺し穿つ死棘の槍』が手に入つたのは大きい。

宝具集めをしていて、これは結構でかい収穫だつた

というか○amazonやつぱりすぐえと実感させられた。

「…人間なのにどうして私達を知つてるんですか？見た感じだと両親は普通の人達ですよね？」

「俺がこっち側の人間だから？」

小猫ちゃんは無表情だが、今少し頬がピクツとした。

大事な質問ははぐらかす様な言い方しかして無いからもしかしたら怒つてたりして。

「…もういいです」

拗ねてしまわれた。別に悪気がある訳ではない

「実際言うと、俺は武器とかを集めるのが好きなんだ。異能を持つてたりする武器をね

？そうするといつかはぶつかるんだよ人間以外の存在とさ。」

「…武器が好きなんですか？」

「どうかこの世にある武器は全て俺の財だ！」

(。・。) ドヤアツつて顔をして小猫ちゃんの方を見ると、冷たい眼差しで返されたが。

あなたがち嘘を言つてる訳でもない。

「俺が悪かつたから、そんな目で見ないでください」

「俺本当は絵本とかで出てくる勇者みたいなのに憧れててさ、お姫様を助けにとかじやなくて最後に敵のボスと戦う時にさ『この剣を：・：抜く時が』みたいなのがあって敵が『その剣はまさか！』みたいなやり取りが好きでさ。そういう武器が俺にも欲しいなって思つたんだ」

「：・：ふふ：・：思つてたより先輩つて幼いんですね。」

「そうかなあ？男なら誰しもそーゆー時がある。」

そんなたわいない話をしていたらいつの間にか教会に着いていた。

正直、夜の教会なんて來たことなかつたから分からなかつたけどこれはもうお化け屋敷ですよ

もう既にチビりそうなのに梟のホーホーで怖さが倍増する。

「ねえ、小猫ちゃんどう入ろっ：・：つて！何してるのさー！！」

小猫ちゃんにどう入る？こうしましよう的な展開を期待して話し掛けたら隣には小猫ちゃんの姿はなく

扉の前にて蹴りに入っている小猫ちゃんが目に入った

「… こうした方が早いですよ。」

いや、ね確かに早いかもしないよ？

でも相手がどれ位の戦力なのか知らないじゃん？

「いやまあね、早いかもしん！」「ウヒヨー！僕ちん当たりかも！」って話させろゴラア！」  
話そうとしたら白髪の神父っぽくないけど神父っぽい服着てるから多分神父がライ  
トセーバーみたいなのを構えながら俺に向かってきたのを宝物庫から首輪が切れな  
かつた剣をだしてそれをはじいた。

つてかやつぱこの剣普通に強いって、あの首輪が可笑しいだけだつて！

「んん？あれえ？人間かあ？まあいつか？薄汚い悪魔と居る時点で討伐対象じやあああ  
！」

剣をもつて突っ込んでくるのを俺の剣でいなす。

剣を合わせれば相手がどんな人間か分かるつて言うけど実際伝わってくるのは殺意  
とか狂気のみ。

剣同士でぶつかる時つていうのはだいたいは命の取り合い。

どうしても殺氣つていうのは飛んでくる。だつて殺るか殺られるかの世界だから。

でもフリードの剣からは狂氣と悲しみしか伝わってこない。

こいつ、多分何かを抱えてる。

俺は咄嗟に宝物庫から『天の鎖』を出し、フリードに巻き付ける  
「おいおいおいつ！なんじやこりや！？僕ちゃん危機一髪じやん！？」  
「よし、小猫ちゃん先に行こう」

「えつ？こいつは？」

まあ、確かに気になるだろう。

「大丈夫、後で取りに来るから」

そう言つてスタスターと進む、小猫ちゃんもそれに付いてくると

「おい！何のつもりだよ！」

完璧にスルーする。

教壇の下に階段があつたので降りる時に

「ちゃんとそこに捕まつてろよ！」

と言ひ降りる。

降りるとそこには沢山のはぐれ悪魔祓い達が沢山と奥に女の墮天使がいた。  
「さつきから上の戦闘音はお前らか！」

と1人の奴が言うと歯止めが切れた様に沢山の悪魔祓いが押し寄せる。

その後ろでニヤニヤしてる墮天使の女が気に入らないし、さつさと終わらせよう  
宝物庫から少しゲイ・ボルグを出す

俺は真名開放ができる、原作のギルガメツシユと違う所だ

原作を見てて思う、真名開放ができなければ宝具は弱体化してしまって。

だから俺は『同調開始』トレース・オンを使えるようになる為に見様見真似で頑張った。まあでも使えるようになつたのは武器の経験をトレースして使えるようになるものだけだが、強化と模倣はめちゃくちや頑張つてるつもりだがなかなか修得できない。

俺はゲイ・ボルグの試し打ちをと思い使う。

『突き穿つ死翔の槍』！

宝物庫から『突き穿つ死翔の槍』イ・ボルグを1人の悪魔祓いに投擲した。

悪魔祓いに当たると周りが爆ぜる。

その風圧で俺達まで壁際にすっ飛んでつた。

忘れてた…

『突き穿つ死翔の槍』って対軍宝具やん

こんな狭い場所で撃つべきではなかつた

ほらみろ、隣で同じようにすつ飛んだ小猫ちゃんにジト目で見られてる。：

## 終劇と開演

「なんで、こんなことに…なつてるのよ！」

俺が悪魔祓い達（沢山）をぶつ飛ばし、小猫ちゃんにジト目で見られてる時だつた  
奥で『突き穿つ死翔の槍』の風圧で吹つ飛ばされた墮天使の女がそう呟いた  
まあ、教会ほぼボロつボロつだつたのもあるだろう。

さてあいつ倒して帰ろう。

「いや、俺が悪いけどこんなに威力でかいつて知らなかつたんです、実験と思つてやつて  
見たら…ね？」

と小猫ちゃんに弁解をしてみる。

「…なんなんですか、さつきの槍」

「まあ、面倒見のいい兄貴の凄い槍？」

間違つてないよ？うん

「…またですか、まあいいです。」

うおつ！

和やかな雰囲気で話してたのに（俺的には）いきなり光の槍が飛んできただで和やかな雰囲気も飛んでつた。

うーん、この墮天使を殺しても大丈夫なのだろうか…  
捕獲の方がいいのではないか？

いや、誰に渡す…。

まあ、グレモリー先輩に渡すか。

宝物庫から『天の鎖』を出し、墮天使の女を確保！

「な、なによ!!」この鎖！」

ガチヤンガチヤンやつているが無駄じや！

この世界の天使とか墮天使は神性がどうしてもある。

墮天すると神性が下がつたりとか色々あるがまあ神性があるってことは『天の鎖』の締め付けが強くなるのさ！

(-, ∀, ) げへへ

「フツフツフツ。これからどうなるかわかつていいるな？」

汚い笑みを浮かべながら俺は『天の鎖』で繫がれてる墮天使の女に近づく。  
「殺すならさつさと殺しなさいよ！まだ私には仲間がいるんだから！」

「殺す？馬鹿なことをいうんじゃない！鎖に繋がれてる女がいたら男はどうするう？  
1つじやないか？んなことわかるだろう？墮天使だから経験は豊富かあ。楽しみだ  
なあ～」

言つとおきたい。わざとだからね！本気じやないから！

やめて！そーゆー目でみないで！

本音を言うとこーゆーのやつてみたかつたの半分とりあえず脅し半分だ。

「…この身の純潔は…アザゼル様や…至高の方々に捧げるつて決めてるのよ  
！…うう」

泣き出してしまった。

なんか可哀想になつてきたな、自分がやつた事だけど。

まあ、アルジエントさんがここに来た理由は多分この墮天使の女が多分アルジエント  
さんの持つてる神器を移そうとしてたんだと思う。

なんの神器かは知らないけど、アルジエントさんの性格を考えると回復系の神器だと  
思うけど。

その時だつた、パリーンつて感じに窓ガラスっぽいところからさつきアッパーした男  
と女2名の墮天使達が入つて来る

「「レイナーレ様！大丈夫ですか！」」

レインアーレって言うのね。

なんか変わった名前だな。レインアーレまでは分かるけど伸ばし棒にレットなんだろう。取り敢えず全員『天の鎖』で捕縛。

そして上に登りフリードを回収してオカルト研究部に帰つた。

後日談としては

レイナーレ達は悪魔が墮天使に条件を付けて返すらしい。

アーシアは帰る場所がなくなつて、オカルト研究部で待つてゐる間に部員の皆と仲良くなりグレモリー先輩に「私の眷属にならぬ？」つて誘われてお姉様！つて悪魔になつたとさ。

そしてここである。オカルト研究部に帰つたらアルジエントさんにアーシアと呼んでください！つて言われたのだ

可愛すぎて発狂しそうになつたのは言うまでもない。

因みにこのアーシアであるが家に両親にはホームステイという形で一緒に住んでいる。

アーシアも駒王学園に通つてゐる。

いやもではなくはかな。

コンコンつとドアを叩く音がする

「イツセーさん、今日も学校行けませんか?」

「Yes, Sure!」

「… 分かりました、それじやあ行つてきます」

まつ、こーゆーことだよ諸君。

俺はあの日から1週間は経つたが、あの日以来学校に行つていない。

「さてと、○amazonでもチエックするかな。」

宝具的な新しいの入つてないかなーと思つて力チャ力チャやつたりしてたがやつぱり『刺し穿つ死棘の槍』みたいな掘り出し物はなかつた

仕方ないか○フオクとかそこら辺でも探すかな

おつ?あつたあつた

『破戒するべき全ての符』

こりやまた凄いの出品してゐるな、取り敢えず締め切りの時間があと20分だから頑張るか。

20分やつてみたが、俺しか買うやつがないからすぐオークションの決着はついた。

明後日届くつてさ。

楽しみだ、俺の宝物庫が潤っていくのが…

まだ対して集まつてないけど。

いつか原作のギルガメッシュみたいにめちゃくちや飛ばしてもまだ余裕があるレベルまで上り詰める！

てか、そーいえば昨日グレモリー先輩がいきなり抱いてくれつて裸で言つてきた夢見ただよな。

確かにあそこまでの綺麗だから、うん。裸を想像まではいかないけど夢に出てくるレベルにまで考えてしまっていたのか

焼鳥と会うまであと8時間であつた。

## 焼鳥と暴露

「イツセー？ ちよつといいかしらー？」

突然母さんに呼ばれたので下に降りると

「アーシアちゃんが、お弁当忘れちゃつたみたいなの届けてくれない？」

「OK、すぐ行こう。」

アーシアがお弁当食えなくて涙目になつてしまふかも知れない、それは断じて許さない！

因みに現在11時。まあ昼飯までは1時間とちよつとあるけれど、早く行つといて損はないだろう。

俺は別に学校が嫌いとか、行きたくないとかではなく面倒臭いだけ、行く理由があればしつかり行く。

行く理由が見つからないから行つてないだけで何か理由があればちゃんと行く、つまり学校に行けない引きニートではなく行けるけど行かない引きニートなのだ

まあ、あんまり遠くないからパーツと行つてパーツと帰つてくるとしよう。

ちなみにドライグだが最近出番があんまりないので拗ねている訳ではなく。同窓会

の皆さんと神器の調整をして出て来ないだけなので心配なんて無用

？同窓会の方々はどうしたつて？

ああ、ほら？俺つて暴力嫌いじやん？だから脳天にエア向けながら軽くお話をしたら皆わかつてくれて。

皆仲良くハッピー?みたいな?

まあ時々手が滑つて何人かのちよつと耳が遠くて話が通じない方を…  
だけど!手滑つただけだから、失敗誰しもあることだし?

俺は悪くない。

そんなこんなで学校についた訳だがここで気をつけなければいけないのは最低限に俺の活動範囲をすることだ。

広すぎると会長その他諸々に見つかる。

なので、ミスディレクションばかりのことをしながらアーシアに弁当を届けてミスディレクションして帰るつて訳だ。

そして、俺は自分の教室3歩手前らへんにいるのだがおかしい。

教室が静かなのである。というかほぼ全クラスそんな感じだ。

全校集会でもあるのか？

まあそつちの方が都合がいいし、アーシアの席にでも置いとおけば気づくだろう。

教室に入ろうと思いガラガラつとドアを開けたその時だった

周りから「かかれー！」という声とともに沢山の人が俺に押し寄せてきて捕縛した。その中にはというか真ん前の抱きついてきているのはアーシアだし周りを見るとにやついている桐生や松田、元浜までいた。

桐生や松田や元浜は中学の時のクラスメイトで比較的に仲がいいほうだったサボリの俺にいる数少ない友達だった。  
で、この状況はつまり

「ハメられたつてことですね、支取先輩。」

多分このどこかいや、遠くの方にいるであろう会長に向けて言うと

「はい、その通りです。今日は学校で行われる模試があるのでどうしても出席して欲しかつたためアーシアさんにも協力していただきました。」

実はアーシアと会長物凄く仲がいい。いつもはこの2人十グレモリー先輩がいるそ  
うで、眼福眼福つて松田だか元浜がメールしてきたのを思い出した。

「まあ、いいです。分かりました、模試受けければ帰つて問題ないんですね？」

「問題ないわけではないんですけど模試は受けてつてください。」

一応進学校だから仕方ないか…

模試を受けた、結果は返ってきてないが多分100点だろう。  
前世では勉強とアニメ見ることぐらいしか興味がなかつた、昼間は勉強夜はアニメ鑑賞そんな日々をずっと続けていた。

死因はもう覚えてないけど、これだけは言える勉強が得意か不得意か聞かれれば得意な方であると

多少模試のせいでお昼が遅くなっているが生徒会室でアーシアと食べていた  
2人で

弁当どつから出てきたつて？アーシアが元々自分の弁当を持っていた。つまり俺がアーシアの分だと持ってきた弁当が俺の分だつた。

母さんもグルだつた。

因みに会長その他諸々は模試関連で皆さん働いている  
「この後、オカ研で活動があるのでイツセーさんも少し寄つていつてくれませんか？その後一緒に帰りましょう。」

一緒に帰りましようその言葉だけが俺の頭の中にリピートする

「わかった、俺も一応オカ研のメンバーだしね。」

多分俺は今凄くだらしない顔をしているだろう。

放課後になり、俺とアーシアはオカ研の部室へと足を運んでいた  
旧校舎だからまあまあ距離があつて面倒臭い……

何だかんだ言って着いてからが問題だつた。  
ドアが開かないのである

「どうしたんでしょうね？」

結構ガチャガチャやつてるのだが開かない。

だが俺は前回の戦いで学んだ。ドアは蹴飛ばしてぶち壊すものなど  
ドカーン、そんな音がした。

音の原因は俺がドアを蹴つて一部分をぶち破つて中に入る、みたいな計画だったのに  
いざ蹴つたらそのまま部室内部へ飛んでつた。  
中に入るとすぐそこにグレモリー先輩がいたので

「いや、開かなくてですね？悪氣があつた訳じやないんですよ！」

ドアが余程ショックだつたのであろう、蹴つ飛ばしたドアの方を見て口がぽつかり空いていた。

ん？というか誰だ？この女の子達

オカ研の新入部希望者だろうか、結構人数いるじやん？！

いやー、オカ研も安泰やなー。

その瞬間蹴飛ばしたドアが炎の渦に焼かれた

「おい！貴様！お前、俺が誰だか分かつてやつているのか?!」

炎の渦の中からホスト風でバブリーな時の売れ残りのようなネックレスや指輪をした男が出てきた。

がそれどころではなかつた。

銀髪のメイドが俺に殺氣出しまくりだつたからだ

いや、面識あるかないか言われたら yes よ？

確かにあの時はサーゼクスさん+銀髪メイドと戦つたけど！

今味方？に近い現状があると思うんだがね…

入った時に銀髪メイドに気付き俺しーらないってやつてたんだけど殺気が強すぎて……やっぱりバレてるやん。

このメイドさんも強かつた、サー・ゼクスさんとの連携はマジきちでしたとしか言いようがない。

というかなんとなくサー・ゼクスさんにさんを付けたらメイドさんの殺気が緩くなつた気がする

だが、パンピ―に向ける殺気ではない！

普通の人だつたらもう死んでるレベルですつて。

「グ、グレイフィア？どうしたの？」

グレモリー先輩がビビりながら聞くと

「いえ、先程入つてきた彼が知人と似てまして今すぐにでも消滅……いえ粉々……そんな訳なので申し訳ありません。」

いま消滅と粉々っていう危なすぎる単語が聞こえたの俺だけ!?違うよね?!言つたよね!?

そんな思いになるまで俺なんかした!?

いや、まあそういえば左腕を吹き飛ばしたような……?  
でもすぐ生えてきたような?

つまり俺はなにもしてない！

終わりよければすべてよし。

「な、なにか俺に用ですかね？？」

恐る恐る知らない人の振りをしつつ聞く。

「いえ、できれば後で校庭に出てもらえれば幸いですが…。」

だめだ、やっぱりバレてる！ソックリさんです作戦で行こうとしたがやはりバレてる！

「ここは素直に土下座しよう…。」

「いや、この度どれか選べと言われば悪魔陣営に着くことにしたんですよ。つまり味方…： だと思うんですよね…： つて」

土下座しながらそういうと少し殺気を抑えたがまだピリピリしてる

「そうなんですか、分かりました。この前の事は後日しつかり返してもらいます。お嬢様、話を戻します。」

実は短期間だが宝具集めのために万事屋っぽいことをやっていた時期があつた。

その中の1件が新魔王派を倒して欲しいと依頼を受けたので殺りに行つて対処されたのがサービスクスさんだつた。

因みに依頼主は旧魔王派のなんちやらつてやつ、名前は覚えてない…。

「婚約の有無はレーティングゲームにて決めさせて頂きます。期間は10日後です。」「おい、そこの人間。俺をこけにして恥欠かせた事と俺を無視したことどれだけのことを仕出かしたか思い知らせてやる！お前もこのゲームに参加しろ！」

ホスト風の男はドヤ顔で言つた。

すかさずメイドさんが言う

「分かりました。そこの… そう言えば名前をまだ知りませんでしたね」

そう言えばそうだっけ？

「彼が話してた兵藤一誠君よ、グレイフィア。」

何を話していたのでしょうか。俺すぐ気になります

「そうでしたか、兵藤一誠様の参加は公式戦ではないため認められます。」

「じゃあまたな、愛しのリアス。」

話がまとまり魔法陣が展開して帰ろうとしていたライダー？だが焼鳥だかが別れのキツスでもしに来たのだろうかグレモリー先輩改め部長に近づいてきたので別れのキックを御見舞し魔法陣に向けて飛ばし帰つていた、半強制的にだが「じゃあ自分達もそろそろ帰りますね、アーシア帰ろう。」

そういういそそくさと帰ろうとしたら

「お嬢様と一誠様はお残りください、勿論眷属の方達も残つて構いませんが今  
からの話を聞くと一誠様への信頼が駄々下がりするかもしませんが」  
えつ？（；・▽・）

何を言うつもりですかね？

「一誠様の武器を一つ、使用禁止にします。」

因みに全員残つた。

「サーゼクス様の左腕をすつ飛ばした武器です。」

ちよつおお!! 事実だけど！ 真実だけどももうちよつとオブラーートに包んで欲しかつ  
たですたい！

これじや、皆さんからの信頼度なんてあるかわからないけどマイナス突つ切るやん！  
だつて、自分達のトップの左腕すつ飛ばしたなんて聞かされたらなんだこいつ？ つて  
なるじやん！

因みに工アである。ありんこ並に軽い威力しかだして無いけどというかまだ全力の  
工アを使えない。

正確には使えないわけではなく使つた時のダメージに俺が耐えられないのだ  
前は使つてないと言つたが使つてないに等しい威力だということ。原作レベルに比

べたらね

「え？」

そう誰かが言つた。

気まずいのでさつさと帰るに越したことはない。

皆にどう思われても仕方ないといえば仕方ないだつて事実だし。

汚れ仕事でも、なんでもやつてた俺が悪いし。

それでいい宝具だつて頂いている。性能がね？

「分かりました。それでは失礼します。」

アーシアを置いてそそくさと出る。アーシアも魔王がどれだけ悪魔にとつて重要な存在かここ数日で教えられている筈だし。

シスター目線で行けば神様傷つけたつてことだしね  
俺は家へ帰つた。

その後の部室では。リアス side

お兄様の左腕をすつとばした？

私はそれを聞いた時耳を疑つた。

別に怒っていたりする訳ではなく、耳疑つたのは魔王の左腕をすっ飛ばしたというこ  
とだつた。

兵藤一誠という存在は魔王の中でも異彩と呼ばれているサーベクス・ルシファーの左  
腕をすっ飛ばせるほどの実力者なの？

イッセーが出ていつた後、グレイフィアがまた口を開いた

イッセーっていうのは皆が彼をそう呼んでいるから私もそう心の中で呼ぶ時はそ  
う呼んでいる

「一誠様がまだ傭兵の様なものをやつていた時の旧魔王派の依頼だつたそうです。彼は  
不思議な武器を集めているそうで、それが報酬だつたら汚れ仕事でもなんでもやつてい  
たそうです。」

小猫が言つていた武器集めの趣味のことね。

「それでは私は、失礼させて頂きます」

「そう言い、私に近づいて耳元でこう囁いた

「貴女の道よ、貴女自身で勝ち取つてみなさい」

「はい、お義姉様。」

そう言つてお義姉様は帰つていた。

私はイツセーをもつと知りたいと思った。

## 唐突と波乱

俺の現状としては、朝起きたら山にいた。

昨日は確かに布団に入り就寝したはずだが、ここは何処だ？

朝起きて、ふういい朝だなあなんて思いながらカーテンをシャーって開けるとそこには1面の山！

でも、部屋は俺の部屋だ。

駄目だ、理解が追いつかん

その時、ドアがガチャつと開いた

開けた相手はグレモリー先輩だった。

「おはよう、イッセー。よく寝れた？」

笑顔でそう言う、グレモリー先輩。

「まあまあですかね、でもいいんですか。俺は貴方のお兄さんの片腕をふつとばしたんですよ？」

「ええ、だつてそんなに強いなら尚更近場に置いておきたいし。言つたじやない、私の事守つてくれるんでしょ？」

「確かにいいました。でも、ここどこですか？俺の部屋なのに外、山だし」

「ここ、私の別荘よ。私というかグレモリーのだけどね？ライザーとのレーイングゲームに向けて特訓するのよ？特訓。」

正直あれ（ライザー）が強いと思えないのは俺だけではない筈…

まあ、エアが使えないぐらいだろうか、元々使う気なんてなかつたからいいんだけど

「特訓つて、なにをするんですか？」

「まだ細かくは決めてないけどなにかいい案ある？」

「修行です…か、そうですね。ここは俺の友達を…呼びますよ」

教えるのが上手い人に丸投げする事にする

逃げたんじやない…適材適所つてやつ。

グレモリー先輩に助つ人を呼ぶと伝え、部屋を出てもらい電話をかける

そいつに電話をかける

「おい、アザゼル。グレモリーの眷属の特訓の講師として来てほしいんだけど」

「そいつとは墮天使陣営のトップウザゼル…コホン、もといアザゼルなのであつた。

「おいおいおい、唐突だな？しかもグレモリー？魔王じやねえか」

「リアス・グレモリーの方ね、取り敢えず今度はライザーとかいうのとレーーティングゲーム？っていうのをやるらしくて俺、参加するから。」

「はっ！お前でんの？！じゃあ、なんで特訓なんかするんだよ！？てか俺がそれやるメリットは!?」

「まあ、取り敢えずそーゆーことだから。現在地、山。もう、エア触らせなくていいなら来なくてもいいけど？」

「( , ゝ ) ウイツス、行かせていただきます」

つて訳でアザゼルが来るけど、よくよく考えてみれば敵の陣営のトップくるつてかなり危なくね？主に味方の方が

てか、なんでアザゼルと知り合いかつて？

宝具の取引き相手のお得意様です、エア見せたら俺が解析するんじやーつてどつぶりハマつて抜け出せなくなつた訳。

勿論、解析できてない。  
アザゼルが来る、また波乱を読んでしまつたかもしけない

# 特訓と当日

「一応こちら友人のゼルゼルンです。教えることに関しては人一倍うまいと思うので。お呼びしました」

ニッコリと笑つているマスクをつけた、アザゼルがそこには居た  
どこのハレルウヤだよ！

「よつ！ゼルゼルンだ、旧友からの電話を貰い駆けつけたぜ！」  
つて訳で特訓をした。

俺はあんまり修行とかすることないから皆の補助。

まずは木場から。

木場はアザゼルから取り敢えず色んな剣を沢山出せる用にと言い渡されていた。  
あれ？俺要らなくね？  
よし、次行こう。

小猫ちゃんは己の血と向き合つた方がいい、あとグーパンにもいろいろ効率的なやり  
方あるから詮索。

つて言われてたけど、己の血つてなんやろーなー。

取り敢えず、小猫ちゃんのパンチを受ける特訓。

タダでは当たつてやらないのが先輩の意地だけど

「当たつて…くださつ…い！」

「嫌…ですっ！」

つて感じで避けた。

したら休憩中に一人でトコトコ木の前に行つてグーパーン！

木がバーンッとぶつ倒れた。

アレに殴られたらジヌ。冗談抜きにジヌ。

(◎ー◎;) やばい。

逃げようとそそくさと去ろうとすると後ろには悪魔がいたのだ。

いや、悪魔だけど。

「…先輩、どこいくんですか？まだ特訓終わつてませんよ？」

とニッコリと笑つていた、いや！いつも君笑わないでしょ！？

無表情キヤラはどこに行つたのさ？

なんでやー…？

つて感じに1時間でつちりしぶられた。

まあ、1回も当たらなかつたんだけどね。

「… はあ・ はあ、 なんで当たらないんですか…」

「んー、 殺氣出しすぎてどこに拳が来るかわかつちやう。 もうちょっと抑えればどこに来るかが分かりにくくなると思う」

まあ、 それでも充分脅威なんだけどね。

何度終わつたつて思つたことか。

「… はあ。 わかりました。 有難うございます」

俺はあんまり信じてないけど、 殺氣で人を殺せるらしいよね・ 刃那、 銀髪メイドが頭をよぎる。

やつぱ、 殺氣で人殺せるなあと考え直したのであつた。

次はアーシアの所に行く、 すると

「イッセーさんのお役に…。 回復… とばす！」

目をつぶつたアーシアがなにかをつぶやいて、 回復の光だろうか緑色の光を手から放つていた。

「お、 やつてるやつてる。」

俺がそう言い、肩に手をかけるとアーシアは集中が解け、肩をピクつとさせ、こちらに振り向いた

「イッセーさん… つて！イッセーさん!? ど、どうしてここに?!」

「ん？ 悪い、邪魔だつたかな？」

「いえ、そんなことはないですよ！ 寧ろ居てくれた方が…」

顔を赤らめてそう言う、アーシアは天使だ。

そんな感じで、1日目の特訓は終わった

「それにもしても、やっぱイッセーの作る飯はうめえな」

今日俺は特に何もしてないので、晩飯を奮つた。

まあ、伊達に家には居ませんよという事だ。

「てか、アザ… ゼルゼルン何時までいるんだ？」

仮面を上手く使いながら飯を頬張るアザゼルがそこにはいた

「ん？ ああ、そうだな明日ぐらいじやねえかな。俺も仕事ほっぽり出してきてるしな、それにお前もなんか考えてるんだろう？」

「まあな」

色々と fate に偏るがちゃんと特訓内容は考えてある

「お2人つてどんな関係なんですか？」

小猫ちゃんが尋ねると周りもうんうんと頷く

「一応、敵。な友達？」

「それで、合つてるが俺はそもそも戦いを望んじやいねえ」

アザゼルは平和主義な訳じやないけど、研究の為ならみたいな考えの持ち主だしな  
後はコカピエロだかが問題起こさないきや良いんだけどね

因みにコカピエロはね。凄いんだよ

俺を見る度、「ギルガメッシュューー！！」って襲つてくる、紀元前から生息してゐるコカピエロはギル様と戦つて居たらしく、俺に戦いを吹つかけてくるのである  
で、1つ疑問ができる、え？ギル様いたの？つていう。

え、俺の存在つてちよつとギル様にきれられない？つて。

まあ、そこら辺は神がなんとかしてくれる！つて言う希望敵観測をしてゐる始末であります

そんな感じで、焼き鳥もといライザーと戦う日が來るのであつた

## 開始と困惑

私 アーシア・アルジエントはとても緊張しています

今私たちは校舎に模して造られたフィールドに居ます。

焼き鳥さんとレーイングゲーム？をやるためにです

この試合には大事なリアスお姉さまの結婚もかかっています  
ですが、本心はこんなに頑張っているイッセーさんがかつこいいなどかそんなお姉さまに申し訳ないことばかり考えています

部屋の隅で腕を組んでいるイッセーさんはライダースーツというものに身を包んでいます

服は指定されなかつたので私は修道服にしました

この10日間、イッセーさんは物凄く頑張っていました

私は知っています特訓のために講師でお呼びしていたゼルゼルンさんが帰つてから夜遅くまで一人ずつ別の練習メニュームで考えて毎日メニューを変えたりなど本当に頑張っていました

この頑張りを登校にと思いました。

一度だけ聞いたことがあるんですが「何故、学校にこないんですか」つてすると、イッセーさんは行く意味がないって言つてました

学校：楽しいのに

「私、イッセー、アーシアはこのまま此処に残る、後は作戦どうりにお願いするわね」

そうお姉さまが声をかけると皆さんパッと動き出し、すぐ私達だけになります

「皆さん行動が早いですね……つてイッセーさん!？」

イッセーさんに話しかけようと思い、振り向くとお、お姉さまに膝枕してもらつてゐイッセーさんの姿があり

心なしか少しに焼けている気がします、むう。ずるいです

私はイッセーさんに膝枕してほしいです

はっ！これは「先輩方に取られちゃうわよ」と言つていた桐生さんの言う通りじやないでしようか

こういう時はポケットに入れてる桐生さんのアドバイスブックを……。

貰つたアドバイスブックの目次を見るとありました

思い人が美人な先輩に膝枕されている時の対処法 P26

こんなに具体的な場合への対処法が載つているなんて……。

流石桐生さんです!!  
えーと?

「そういう時はあざとく狡猾にいきましょう。想い人と美人な先輩との膝枕が終わった時が狙い目です、その時に美人な先輩の膝枕の違いを相手に伝え、かつこちらの膝枕の優れている点を述べましょう。なおこの際顔の角度は相手の目線の下つまるところ上目遣い+涙目で声は少し甘えた声でいきましょうこうしてしまえば男性はイチコロです。」

あざとく狡猾という意味が少し分かりませんが後でイッセーさんに聞くとしてこれでイッセーさんに膝枕してもらえるんでしょうか、でも桐さんがくれた本に書いてある事ですし。

よし、アーシア・アルジエント覚悟を決めました

イッセー side

今日がレーティングゲームの日なのだが、何故か俺はグレモリー先輩に膝枕をされて  
いる

すげえ気持ちいい。

なんかご褒美だとかでいきなり膝枕された訳だが、皆が頑張っている間に自分だけこんな事して貰つて申し訳ない。

一応どんな感じになつたかのイメージだけ説明しておこう  
木場くんの魔剣創造は士郎とほぼ一緒じゃねえ？とか思つて戦闘スタイルを近づけたのでほぼほぼ一緒に弓使えん。

小猫ちゃんは葛木？先生だかに似てるので手に魔力を纏わせてみました。イメージはハンターハンターの念の概念でいつたら出来た

姫島先輩とグレモリー先輩は正直あれはあれで完成されたスタイルだから基礎能力向上に務めて貰つた

「はい、おしまいよ。このゲーム勝つために、頑張つて貰うからね？」

「はい、ありがとうございます。」

と述べておく、どちらかと言うとどちらもさまだけど立ち上がった瞬間だった、アーシアの青少年の目には毒な恰好にソファーアの影でなつているのが見えたのは

思わずサッと座りなおした

なんだあれは……？

あんな破廉恥な服をアーシアに持たせた覚えないぞ……

「ん？どうしたのかしら？」

「流石に不振に思つたらしくグレモリー先輩が話しかけてきたけどこれは言えない

「そ、そのグレモリー先輩。リアス部長つてお呼びしてもよろしいですか？？」

その一言を聞いた瞬間先輩は顔を真っ赤にし顔をうつむけてしまつた

ちよつと話題転換と呼びにくさを解消しようとしたらこうなつてしまつた  
何か気に障るようなことをしてしまつたのだろうか、謝つた方がいいよな

「すみません、：嫌でした・？」

「ううん。嬉しいぐらいよ！その代わりなんだけど私もイッセーつて呼んでいい？」

「え？全然いいですよ」

つと、問題を先延ばしにしていただけだつたが、アーシアどうしよう

後ろ姿しか見ていないけど後ろは背中バツサリ空いたドレスっぽかつた  
あんな服うちには無い、どつから・？」

そんなこんなをしていた瞬間だつた。

「リアス。ちまちまやるのは俺としてはいいがお前的にはつらいだろう？俺もそろそろ  
飽きてきたところだ。どうだ？一騎打ちと行かないか？」

まだ一人として減つたというコールが流れていない中この交渉に乗ると思つてはいるのか：？

でも今のうちの眷属の中でライザーを相手できる可能性があるとしたら、リアス部長のみなのも間違いない

「どうしますか、リアス部長。」

「私はこの申し出受けようと思う」

ほぼ沈着状態だつたこのゲームが大きく動いた

因みにアーシアは放送にビビツて急いで着替えてる……

# 終了と悲劇

屋上の上にて揺れる紅髪。

我らが部長、リアス部長だ。

「リアス部長。危なくなつたら、手を出します。部長がリタイアさえ宣言しなければ100%勝てますから」

この自信は確信だ、俺も不死殺しの武器は持つてゐるし、禁手だつてある。

部長は多分一番特訓に対しても成績がでてゐるかもしない1人なのだ負けることはないと思うが

「うん、わかっているわ、私がここまで頑張れたのもイッセーのお陰だもの。」

「おいおい、正気か？リアス。俺はてつきりそこの人間をぶつけてくるとおもつたんだがなあ？」

腰に手を当て、余裕そうに言う焼き鳥

てかちよい前ぐらいから思つてたんだけど所々ギルとキャラかぶつてるよなこいつ。

まあ、慢心してること金髪つてところだ…け…

その二つがあればギルなのでは…!?

「俺のところに来る前に少し教育が必要だな！」

炎の翼を広げ、飛んでくる焼き鳥。

なんかお前の発言、なんでもエロ同人みたいになるんだな

多分焼き鳥が言うからだろうけど

対して部長は片手を前に出し、滅びのなんちやらとかいう危ない魔力の塊を焼き鳥に向け放つ。

結構な速度で飛んでいくソレをライザーはギリギリで躱す。

「そんな単純な攻撃、俺には当たらないぞ」

なんて言い、ソレが焼き鳥の横を通り好きようとした瞬間、ソレがモヤツとボールの様になり焼き鳥の体を貫いた

「ガハッ！」

血反吐がべしゃつと口からこぼれる、だがその瞬間ライザーの傷口が燃え始めて、再

生していく

「クツ、今のは結構効いたぞ。だが同じ手は二度と食わん。」

焼き鳥選手そのまま急接近！リアス選手、おおーっと、焼き鳥選手の出した炎を紙一重で避けていくー！

……ん？『エルキ』つと

後ろに仲間ではない気配を感じたので『天の鎖』をだして捕縛してた何がかかつたかなー。

部長を置いて少し離れてみるとなんとおっぱいがかかつっていた。

「クツ、しくじりました。」

「えーと、たしか焼き鳥の所のクイーンの方でしたよね。ん？姫島先輩はどうしたんですけど？コール鳴つてないっすけど」

「ライザーライザーライザー様がリザインされましたのでリアス様方の勝ちになります」

グレイフィアさんの声が聞こえる、姫島先輩のかと思つたらまさかもう勝つとは

「そんな…ライザーライザーライザー…」

おっぱいがしゅんとしているそろそろ鎖とらんとね

かいじ：「イツセー！探したわ！いきなり居なくなるんだもの、心配したわ。ライザーに勝ったのよ、貴方のおかげ？」

顔が怪しく曇る。

「イツセーさん！お姉さま！やりました…ね？」

そして、アーシアが来たがアーシアの顔も曇る

何故だろうか、あ、解除つと。鎖から解放されたライザーの女王はそそくさと消えて  
いつた

あ、何故二人とも黙つてこちらをジトーと見てくるのか分かつた気がする  
傍からみればさつきの状態はまるで性犯罪者じやないか

「あ、あの。お一人さん？えーとその誤解です、別にいかがわしい事をしていたわけ  
じやないんですよ、気配があるなーと思つて鎖で捕らえたらあんなことに、不可抗力で  
す」

「イツセーのばかあー！」

「うう、イツセーさん！後でお説教ですかー！」

悲しそうな顔の部長と、涙目なアーシア。

この後大変だつたことは言うまでもない